

馬鹿者を命ず!

第四回 若者VSよそ者 渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

前回までのあらすじ

大渡薫子と出会い、町おこしに気合いが入る悠太。早速、地域おこし協力隊の一員である広岡卓司を訪ねるが、悠太が見たのは、血だまりの中の広岡だった。一命はとりとめたが……。

「静かにしてくれないか」
不機嫌な顔で部屋から出てきた広岡卓次の負のオーラに悠太は思わず一歩後ずさった。

広岡は悠太を無視して、ナースステーションとは逆の方へと廊下を歩き出す。「どちらへ？」

広岡は答えない。

「広岡さん！」

広岡は立ち止まり、振り返った。

「誰だ。君は？」

「僕はまちおこし特命社員の石打悠太と言います。今日、広岡さんを訪ねたのは僕です」

広岡はますます不快げな顔をした。

「俺の腕に巻いてあったとかいいうベルトはお前のものか」

「はい」

「余計なことをしやがって」

広岡は心底迷惑そうな顔をした。

「お言葉ですが、余計なことだとは思っていません。あの場に居合わせたら誰だって同じようにしたと思います。何があったか知りま

せんが、死んだりするのはやはりよくないです」

「若造が利いたふうなことを言うな！」

広岡は舌打ちして歩き出した。

「広岡さん、どちらへ？ まさかまた死のうと……」

「トイレだ」

用を足し、トイレから出てきた広岡は廊下で待つ悠太に苛立った顔をした。

「まだいたのか？」

「お聞きしたいことがあるんです」

「俺は眠いんだ！」

広岡は病室に入り、ドアを思いきり閉めた。悠太はそのドアを開けようとしたが思い直した。広岡は話ができる精神状態ではないのだ。

悠太は病室を離れた。明日またここに来てみよう。明日が駄目なら明後日も来よう。広岡との面会が先に延びればその分、まちおこしプロジェクトの企画書執筆に充てられる時間が減るが、彼が話をする気になってくれなければ先に進めない。

登場人物

石打悠太 (いしうち・ゆうた)

25歳、主人公、商店街の再生や町おこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員で入社2年目。四国・伊予南市に赴任する。

四分地恒三 (しぶち・こうぞう)

59歳、天興大学地域デザイン学部教授で西朱雀プロジェクト社長。

新庄誠人 (しんじょう・まこと)

39歳、伊予南市役所・地域振興課長。

大渡晴美 (おおわたり・はるみ)

45歳、伊予南市長。

大渡薫子 (おおわたり・かおるこ)

21歳、大渡晴美の娘、京大阪大学で建築を学ぶ。

喜多嶋翔 (きたじま・しょう)

25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

青山麻衣 (あおやま・まい)

24歳、悠太の元カノ。就職した大手有名ネット通販会社の先輩から交際を申し込まれ、悠太をふるのだが……。

広岡卓次 (ひろおか・たくじ)

49歳、地域おこし協力隊員として東京から伊予南市に移住したが……。

悠太はエレベーターに向かったが、一歩足を踏み出すごとにスポンがずり落ちそうになり、それでもまだベルトを返してもらっていないのに気づいた。

廊下を引き返そうとしたその時

「行くなあ！」

広岡の叫び声が聞こえた。

「広岡さん！」

悠太は病室に駆け寄り、ドアを開け中に飛び込んだ。次の瞬間に体が宙に浮き、椅子が転がる音とともに床に叩きつけられた。椅子が何かに足を引っかけてしまったらしい。

悠太は床に突っ伏した。痛みと衝撃で起き上がれない。

床に両手をつき、ようやく顔を上げると、ベッドの上の広岡が呆れた顔をしてこちらを見ていた。

「何をしているんですか！」

看護師の女性が部屋に駆け込み明かりをつけた。

「あなた、鼻血が出ているわよ」

悠太は手のひらで鼻と口を押えた。その指の隙間から赤い血が流れてくる。唇も切ったらしい。

「広岡さん、ここの次第によっては今すぐ集中治療室に入ってもらいますよ」

「寝入りばなに夢を見たんだ。それで思わず怒鳴ってしまったらしい」

「あなたはその声を聞いて、病室に飛び込んだの？」

悠太は「はい」と言った。

当直の医者に怪我の具合を見てもらった悠太は空いている病室のベッドに寝かされた。レントゲン検査の結果、骨折していないと分かったが、しばらく休んだ方がいいと医者が判断したのだった。

安静にしているうちに顔の痛みは少しずつ遠のいていった。

悠太は麻衣のことを考えた。麻衣は「明後日の土曜日、そっちに行きたい」と言っていた。このままだと事務所兼社宅の見学に来る

大渡薫子さんと鉢合わせしてしまう。

やはり断ろう。電話ではうまく言えないかもしれないので「土曜日は僕も出張でここにはいない」とメールを送ろう。

いや、それは駄目だ。ふられたとはいえ麻衣は彼女だったのだ。元カノにそんな嘘をつくのは人としてどうかと思う。それに会えるなら会いたい気持ちもある。会ってどうなるものでもないけれど、会えるチャンス逃したくはない。

